
フォーカード？ いや、革命だ！

妖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フォーカード？ いや、革命だ！

【Nコード】

N2014Y

【作者名】

妖

【あらすじ】

人間界、魔界、天界……この三界で成り立つ世界

この物語は魔界の家庭教師？が引っかき回したり、引っかき回されたりするお話です

これは更新したとしても順調に行けるかどうか分からない大分チャレンジ要素の多い作品となっております

そんなんですが時間があるときにでも、ちょっとのぞいていただけたら嬉しいです

オープニング

豪華な調度品、大きなベッド、どこか禍々しい雰囲気。

外は暗く、遠くからは何かの叫び声が聞こえる。

そう、ここは魔界。

争いが絶えず、凶悪な悪魔が跋扈する闇の世界。

そんな物騒な場所で話は始まる。

「あゝあ．．．．．つまんねえなあ」

「いやいや！」

お前ボクの家庭教師だろ！？

つまんないとかじゃないだろ！」

「．．．．．なあエミール、なんかおもしれえことないか？」

「ボクの話聞いてた！？」

「オオ！　そう言えばアイツ地獄にいるんだったな．．．．．ちよつくら行ってみるか！」

「だから聞けーーーー！！！！」

我が道に行くマイペースな男を止めようとするフードを被った男の子。

彼らは一体何者なのだろうか．．．．．それはまだ謎に包まれている。

少年が腰の辺りに飛びつくと、男は立ち止まり振り向く。

「わかってるって．．．．．（お前のオヤジにも頼まれてるしな）」

「ホントか!？」

「つていうか父上も、なんでお前みたいな不真面目なやつを家庭教師につけたんだ？」

「そりゃあ、俺が優秀だからだろ？」

「はいはい………でお前父上と何処で知り合ったんだ？」

「信じてねえな、まあいいけど。」

「ハゴスと出会った場所か？」

「あゝ………何処だったかねえ」

「だから父上の名前を呼び捨てにするなッて！」

「父上は魔界大統領だぞ!!」

「その気になればお前なんか小指一本で殺せるんだから気をつけろよ!!」

「ああそうだったな、小指一本………ねえ」

男は少年に見えないように小さく笑う。

その顔はまさに獰猛な野獣の様な笑みだった。

どうやら男は少年に隠していることがあるようだ。

少年が気付く前に獰猛な笑みを引っ込めると、代わりに胡散臭い笑みを浮かべる。

「そう言えばお前はボクよりも長生きしてるんだから、二つ名の一つでもあるんじゃないのか？」

「二つ名………なくはねえけど、餓鬼には教えねえなあ」

「またボクをバカにして………ハア」

「お前はまだまだ子供さ、だがまあ………今日の模擬戦で良い成績を残せたらお前の質問に一つだけ答えてやるよ」

「ホントか!？」

「ああ、本当だ。」

悪魔はウソはついても、約束は破らないもんだ」
「絶対だからな！」

そう言い残すとエミールは部屋から走って出て行った。
その後ろ姿を苦笑しながら見送る男。

「まったく……ハゴスには微塵も似てねえなあ」
「余計なお世話だ」
「うお！？」

いきなり後ろに出てくんなよ！」

「フン、お前が隙だらけなのが悪いのだろう？」

「真後ろに転移されて気付ってのは、なかなか無茶言ってくれるぜ」

男の後ろに音もなく現れたのは、エミールの父で魔界の大統領ハゴス。

その本当の姿を見た者は魂すら残さず消滅するとまで言われている男だ。

そんな人物に家庭教師の男は親しげに話しかける。

「で、まだ動かねえのか？
もし暴れるってんなら手を貸してやってもいいぜ？」
「……………それはできん。」

だからこそお前に下げたくもない頭を下げたのだ」
「はあ……………つまんねえ。」

昔のお前だったら、もっとハツチャケてただろうに」

「お前には、まだわからん（自身の身よりも優先すべき者がいない

お前にはな)」

「わかってると思うが、来年までだぞ？

そう言う約束だからな……」

「ああ、それで借しは帳消しだ。

頼むぞ、アグニス」

そう言い残すとハゴスは転移の術式で執務室へと移動した。
残された男は小さくため息をつく。

「ここではアグニって呼べよな、何のための偽名だったの。
それにしても、はぁ……つまんねえなあ。

とりあえずあの餓鬼ほつといたらうつせえし、様子でも見に行くかね！」

男はポケットに手をつっ込み部屋を出て行った。

今は昔、人は闇を恐れていた。

闇を恐れ生きることでは慎ましく生きることができていたのだ。
しかし……人間の科学力が進化することで、徐々に闇を恐
れることがなくなってきた。……

これはそんな人間たちを戒めるものたちの物語である……
かもしれない。

「くっそォ、あの時アグニが声をかけてこなければ勝てたのに！」
「そんな簡単に注意を逸らすお前が悪いんだろ？」

話しながら廊下を歩いているのは、所々に小さな傷を負ったエミールとどこか楽しそうなアグニである。
どうやら訓練は惜しいところで失敗したようだ。

「というわけでお前の質問には答えないからな」

「少しぐらい、いいじゃないか！」

「約束は約束だからな」

「ちえっ」

不満はあるが、これまで短くない時間を共に過ごしてきて彼が折れないことを知っているエミールは諦めることにした。
その子供っぽい反応に苦笑しながらアグニは軽く頭を撫でる。

「まあ、惜しいところまで行っただんだ。
次はイけるだろうよ」

「……当たり前だろ！」
ボクは魔界大統領の父上を持つ死神、エミールだぞ！」
「そうだな……。」

まあ俺はお前自身を評価してるんだがな」

「同じ意味じゃないのか？」

「いつかわかるさ……（こづいづのは自分で気付くもんだしな）」

不思議そうに首を傾げる少年の頭をさつきよりも強めに撫でると、突然立ち止まった。

そしてアグニは前方の柱を睨みつける。

「オイ、そこにいるヤツ出てこい」

「……貴様に気付かれるとはな」

そう言つて柱の陰から現れたのはハゴスの側近兼秘書をしている魔界三豪傑の一角、雷帝サイロスだった。

その顔はどこかアグニを侮蔑している様だ。

しかしそんなことを微塵も気にせず、気配を殺して待っていた理由を尋ねる。

「お褒めにあずかり、恐悦至極……で、なんの用だ？」

「チツ、生意気な。」

貴様の様な何処の馬の骨とも知れぬ輩にご子息を預けるとは、あの方は何を考えておるのだ？」

エミーゼルを見て、ため息をつくサイロス。

その溜息にエミーゼルは下を向き、小さく肩を震わせる。

アグニはそれを見て小さく舌打ちすると、少しだけ前に出てサイロ

スの視線を遮った。
するとサイロスは視線をアグニの顔に移し、鼻で笑う。

「用があるなら、早く言え。」

俺は早く部屋に戻りたいんだよ」

「ああ、そうだったな。」

「……………大統領閣下がお呼びだ。」

直ちに執務室へと来るように」

「わかった……………それだけか？」

「本当に生意気なやつめ……………あんまり調子に乗らないことだ。」

お前なんぞ、私にかかれば一瞬で消し炭に出来るのだからな」

「はいはい、わかったわかった。」

魔界三豪傑様は忙しいんじゃないのか？

俺なんかに構ってないでさっさと行ったらどうだ」

「チッ！」

自分の脅しに微塵も恐怖を感じていないアグニに苛立ちを感じつつも、サイロスはその場を去っていった。

消えてからもしばらくサイロスの去っていった方向を見ていたアグニだったが、ふと自分の服の裾を掴んで震えている存在に気付く。

「……………どうした？」

「なんでアグニはサイロスが怖くないんだ？」

いや、サイロスだけじゃない。

お前が戦つてるところはあんまり見たこと無いけど、強さは精々中級悪魔くらいだろ？

なんで自分よりも強い相手にあんな風に接することが出来るんだ？」

「なんでって言われてもなあ．．．．．なんとなくだな」

「なんとなく!？」

「まああえて言うなら、俺はハゴスに頼まれて来てるわけだから、ハゴスの部下であるアイツらは手を出してこないだろうからな」

「それでも、もし隠れて手を出して来たらどうするんだよ！

お前死んじゃうんだぞ!!」

「そんな時はそんな時ってこゝろそんなの嫌だ!」．．．．．大丈夫だつて、俺はお前が思ってるほど弱くないんだぜ？」

顔を歪め、目に涙を溜めて叫ぶエミールに少し驚いたアグニだったが、その場にしゃがみ込んでエミールに視線を合わせる。

「それに俺だつて死ぬ気は無い。

目的もあるしな．．．．．だからあんまり心配するな」

「し、心配なんてしてない!!」

た、ただお前がいなくなったら家庭教師が居なくなつて困るから．．．．．」

「ああ、わかつてるって」

目元を袖で拭いながらそっぽを向くエミールを苦笑しながら見つめる。

そしてスツと立ち上がりエミールに背を向けた。

「もう大丈夫だな．．．．．さてつと、じゃあ行くとするかね」
「何処に行くんだ？」

「どうやらハゴスが俺に用があるみたいだからな」

「あ」

「忘れてたのか……まあいいけどな。」

お前は部屋に戻って、今日の訓練の反省点を纏めとくように。
特に最後の魔法の撃ち合いのことな」

「わかった」

「よし、じゃあな」

アグニはエミールに背を向け、廊下の曲がり角へと消えていった。
その背中に向けて小さく呟いた「ありがとう」という言葉はアグニ
に届くことはなかったが、その気持ちは伝わっていたことだろう。

第1話（前書き）

一人お気に入り登録していただいたので、二話目も上げます

第1話

執務室の前に着いたアグニは、ノックもせずにいきなりドアを開ける。

すると中には豪華なイスに座った魔界大統領ハゴスの姿があった。

「来たぞハゴス、何の用なんだ？」

「・・・・・・ノックぐらいしろ。」

もし我以外に誰か居たらどうするつもりだ」

「お前以外の気配感じなかったし、実際居なかったんだからいいだろう？」

「はぁ・・・・・・もういい」

ため息をつき、首を小さく横に振るハゴスだったが、やはりアグニはまったく気にしてない。

それどころか何故か胸を張っている位である。

気にしていたら話が進まないと思ったハゴスは、早速用件の説明に入ることにした。

「お前を呼んだのは他でもない・・・・・・地獄を知っているな？」

「ああ、そりゃあな」

「では地獄に『暴君』が居ることはどうだ？」

「一応は知ってる。」

そういえばアイツ地獄でなにやってんだ？」

アグニの質問にハゴスは顔を顰める。

何故そんな顔をするのかわからない彼は首を傾げるが、ハゴスの次の言葉にその顔は驚愕に染まる。

ちなみにここで言う『暴君』は、ある悪魔の二つ名である。

「……………係だ」

「何だつて？」

「プリニー教育係だ」

「ふーん……………つて、はあ！？」

ここでデイスガイアを知らない人に説明をしておくと、プリニーとは生前に罪を犯した人間の魂をペンギンのぬいぐるみのような物に詰め、その罪を誰かに尽くすことで償うという存在である。

投げられると爆発することから、爆弾の様に使用される場合もあるので非常に過酷な償いと言えなくもない。

追記するとプリニーには心得が存在し、一番最初の心得は語尾に「ッス」を付けると言うものである。

「なんでまたそんな仕事してんだ？」

「理由は知らんが、魔力を失っていることと関係があるのではないか？」

「アイツまだ血吸ってないのか！？」

「何百年経ったと思ってたんだよ……………」

「あやつの約束に対するこだわりは、凄まじい」

二人は昔の暴君を思い起こし、懐かしんだ。

決して心温まる思い出など無いが全力で戦っていたときは、まるで恋人との逢瀬のように心躍ったものである。

しかしアグニはここに昔の知り合いの話をしに来たわけではない。

「で、アイツがどうしたんだ？」

「結論から言うと、地獄で暴れ始めたようだ」

「ほう！ そりゃあ面白い事になってるな！！」

「面白がっている場合ではないぞ」

「俺にはあんま関係ねえしなあ」

「いや、関係はある」

「は？」

アグニは現大統領府に隷属しているわけではない。

故に暴君が政府転覆を企もうがあまり関係ないのだが、ハゴスが言うにはどうやら関係があるようだ。

その理由を聞くために耳を澄ますアグニ。

「先ほど反逆を止めようと地獄へ刺客を放ったのだが、撃退されたようなのだ」

「腐っても『暴君』だな。」

吸血鬼の頂点は伊達じゃないってことか」

「茶化すな。」

「……そこで援軍を送ることにしたのだ」
「誰を送るんだ？」

その言葉を受けて、ハゴスの表情が歪む。

まるで自分の身が切られる苦痛を感じているように。

「なんだよ？」

「アバドンだ」

「特殺任務部隊か………って、おい！

あの部隊のトップは！？」

「そうだ、我が息子………エミールだ」

特殺任務部隊『アバドン』とは、その昔魔界が荒れていたときに猛威を示した部隊である。だが現在は名前は物騒だが今まで実戦経験も殆どなかったお飾り部隊であり、構成メンバーも若く余力のない悪魔で構成されている。

そんな部隊の隊長を、何故大統領の息子が務めているのかは………
・いずれ語るときが来るだろう。

「アイツをまだ実戦に出すのは早いぞ！
その任務は魂を狩ったことのない死神にとって、荷が重すぎるだろうが！」

「それは分かっているつもりだ。

しかし反逆者の処理は特殺任務部隊の仕事だ」

「………どうしても行かせるのか？

下手するとあの餓鬼死ぬぞ」

「大統領として特例扱いは出来ん」

組織のトップは常に冷静且つ客観的な視点を持たなければならない。
例えばそれが自分の息子の危機に繋がろうとも………。

「話は分かった。

だが俺を呼んだ理由が分からねえ。

お前は俺に何をさせたいんだ？」

そう聞くとハゴスはイスから立ち上がってアグニに向かって歩き始め、アグニのおおよそ2メートル手前で立ち止まった。その目には強い意志が宿っている。

「頼む……息子に付いてやってくれ。

自由に動けるのは貴様だけなのだ。

部下を使えば公私混同と言われ、内部で反乱が起こるかも知れん」

「……」

「貴様は今の魔界の現状を知っているだろう。

地獄では現政府に不満を持っている者も多い。

……それに『彼奴』のこともある。

だから頼む」

そう言つて深々と頭を下げる姿は、魔界大統領ハゴスではなく、一人の父親の姿だった。

アグニはその姿を見て、一端何かを考えるように目を瞑る。

そしてゆっくりと目を開けた。

「俺もアイツほどじゃないが、交わした約束は守る。

俺がお前と交わした約束は、過去の借りを帳消しにする代わりに息

子の面倒を見ること。

「……………エミーゼルの近くに居ないと面倒を見れないだろう?」

「……………すまんなアグニス」

「……………俺は約束を守るだけだ」

こうしてアグニの地獄行きが決まった。

ちなみにアグニは地獄へ行ったことがなく、地獄に何かあるのかと顔には出さないが若干楽しみにしている。

地獄のことを考えていると、ふと一つの疑問が思い浮かぶ。

「そういえばアイツは、なんで反逆始めたんだ?」

「今プリニーの数が増えすぎているのは知っているな?」

「まあ一応な」

「故にプリニーを出荷せずにある程度処分する事にしたのだが、その処分するプリニーがアヤツの教育していたプリニーだったらしいのだ。

アヤツはそのプリニーどもに、出荷する前にイワシを馳走する約束をしていたらしい。

その約束を守るためだと聞いている」

「……………変わらないなあアイツ」

「そうだな」

「だが何故イワシなんだ?」

「……………知らん」

これから戦うかも知れない相手のことを思い出しながら、何故か少し和んだ二人だった。

果たして地獄には何が待ち構えているのか?

そして『暴君』とは一体どんな悪魔なのか？
全ては地獄で明らかになる。

第1話（後書き）

エミールマジ天使w

……まあ俺が一番育てたのはデスコなわけだけでも！

今なら結構安い値段でディスガイア4は買えるので興味がある方は是非

ちなみに後日談やアペンドディスクの敵は結構レベルが高いので、もしやるかたはお気をつけを……レベル5000とかだよ？

いやまあ、後日談の最後に出てくる奴が一番鬼畜なわけだけでも一度した攻撃はダメージゼロで、こっちは相手の攻撃食らえばほぼ確実に死ぬという中々の鬼畜っぷり

装備整えて、装備品のレベル上げて、一気に落とすのが常套手段

第2話（前書き）

そろそろ資格試験の勉強を本格的にしなきゃならないな……趣味は
しばらくお預けかな？

第2話

執務室を後にしたアグニは、地獄に行くことを伝えるためにエミール部の部屋へと向かう。

長い廊下を歩いて部屋の前に着きドアを開けると、アグニに言われたとおりに机で今日の訓練の反省を書き出しているエミールの姿があった。

「おお、やってんな。

真面目だねえ」

「うおい！ お前がやれって言ったんだろ！」

振り返って怒鳴ってくるエミールだったが、アグニは微塵も気にしていないようだ。

むしろその反応を楽しんでいるかの如く笑顔である。

アグニは笑顔のまま机の上にあった反省点の書かれたレポートを手に取り、読み流す。

レポートには最後の相手を倒したと思って気を抜いていたら、生き残っていた相手に不意を突かれて負けたと書いてある。

まだまだ精神的な粗が目立つ内容だったので、若干眉をひそめたアグニだったが直ぐに表情を元に戻しレポートを机の上に戻す。

「そうだったか？」

「……………まあいいじゃねえか。

そんなことよりハゴスから伝言があるぞ？」

「父上から？」

エミーゼルとハゴスは最近直接会うことも殆どなく、そんな父親から突如伝言があると言われ疑問を感じたようだ（ちなみに言っておくと別に家族仲が悪いわけではなく、ただハゴスが忙し過ぎるだけである）。

アグニは地獄で反逆が起こったことと、その鎮圧にエミーゼル率いる特殺任務部隊アバドンの出動が決まったことを話した。すると顔を青くしたエミーゼルがアグニに問いかける。

「ボ、ボクが!？」

「そう、お前がだ。」

何か問題でもあるのか？」

「え、でも、だって……………」

「まあ決定事項らしいから断れないみたいだぞ？」

「そんな……………だってボクは……………」

まるでこの世の終わりのような顔を浮かべるエミーゼルに苦笑するアグニ。

無理もない。

地獄にいるのは弱体化されているとは言え、魔界有数の極悪人達。まだまだ経験不足のエミーゼルが怖がるのもしょうがない。

とりあえずこのままではまともに会話も出来ないなので、まずは落ち着かせることにした。

「まああんま怖がんな。」

「一応俺もついて行ってやるからよ」

「ほ、ホントか!？」

「うお!？ 本当だから落ち着け!」

俯いていたエミーゼルはバツと顔を上げ、アグニに掴みかかる。

流石に掴みかかってくとは思わなかったアグニは、一瞬はじき飛ばそうとする自身を無理矢理押さえ込んだ。

ここで否定的な行動を取ると、またエミーゼルはネガティブモードに入ってしまうために、正直結構心拍数が上がったアグニだった。だが一つだけ忠告するために、アグニは顔を引き締める。

「ただし俺は極力戦闘に参加しないぞ？」

俺が狙われたら話は別だが」

「え？ なんで？」

「俺はアバドン所属じゃないしな。」

もし俺が戦闘に参加したら、出しゃばるなって言われちまうだろ？」

「………そっか、そうだったな」

少しだけガツカリしたようだが、最初に比べればマシな精神状況になったようだ。

知らない場所に一人で行くのは結構不安も大きいから、知り合いが一人でも多い方が気が楽なのだろう。

アバドンのメンバーは完全に上司と部下の関係な上、エミーゼルに従っている理由が魔界大統領の命令だからという理由なので、完全なビジネスライクな関係故に数には入れない。

エミーゼルは自身の頬を叩き、気合いを入れる。

「よしっ！」

待っているお、地獄の反逆者どもめ！

大統領の一人息子、死神エミールが鎮圧してやるぞー！」

「その調子だ！」

気持ちで負けてたら何もできねえからな（まあ今回はちょっと相手が悪いかも知れねえが、最悪コイツ連れて逃げりゃいいだけだしな）

「

アグニは最悪エミールだけ生きていれば問題ないので、アバドンが全滅しようと気にしない。

下手に手を広げすぎると、大事なものがこぼれ落ちてしまうかも知れないから……。

少し物思いにふけるアグニだったが、まだ任務開始日時を伝えていなかったことを思い出す。

「出発は明日の朝だ。

しつかり準備しておけよ？」

「わかった！」

明日はよろしく頼むぞー！」

覚悟が決まったエミールの瞳にはこの任務を必ずこなしてみせると、決意の炎が燃えさかっている。

尊敬する父から頼まれた任務。

今まで目立った功績のないエミールにとって、張り切らない理由はなかった。

ただ反逆しているのが誰か確認しなかったことが、彼にどんな結果をもたらすかはまだ誰にも分からない。

そしてアグニは聞かれない限り教えるつもりは無い様である。
コレも一つの教育と考えているのだろっ。

「じゃあ、また明日な」

「うーん……………杖はアレで良いとして、ローブはどう
しようかな？」

いや……………でも……………」

もう明日の任務の事を考えているのか、アグニの挨拶すら聞こえない位思考に没頭しているエミール。

そんな余裕のないエミールを見て肩を竦めるアグニだったが、ふと自分の過去を思い出し苦笑いを隠せなかった。

誰かに褒められたい、誰かに認められたいという想いを抱いたことがないアグニにとって、エミールの気持ちは余り理解出来ないものだったが、昔は自分よりも強い相手と戦うときにこれくらい緊張してたなあと過去を振り返る。

そのまま部屋を出て自分の部屋へ向けて歩き始めるアグニ。

昔の事を思い出した彼は、ふと昔の仲間達に会いたいという気持ちが少しだけ湧いたようだ。

「明日もし加勢する事があるなら、久しぶりに誰か呼ぶか……………」

今のアイツがどの程度の力を持っているかわからねえし、備えあれば何とやらって言うしな」

廊下で呟いたその言葉には、どこか楽しそうな気持ちが込められて

いた。

彼の特殊能力は仲間の召喚。

魔物使いの突然変異種たる彼しか持ち得ぬ能力である。

その呼び出す相手によっては、明日の地獄は文字通りの地獄になるかも知れない。

「そうと決まれば誰を呼ぶか考えておかないとな!」

誰を呼ぶか考えているその姿は、遠足を楽しみにしている子供の様に純粹に見えた。

例えその結果が激しい戦いになるのだとしても……。

第3話（前書き）

ゼロ魔……考え中

デイスガイア4……試行中

なににせよ12月にやらなきゃいけないことがあるから、あんま身が入ってない感じが……

第3話

魔界最下層の『地獄』と下級悪魔が住まう下層区の境目……そこにはエミール率いる特殺任務部隊アバドンと、付き添いで来ているアグニの姿があった。

眼下に広がる頑強な砦のような刑務所『地獄』は、エミールに大きな緊張を与えていた。

「あ、アレが地獄……」

「大丈夫ですかエミール様？」

「だ、大丈夫に決まっているだろ！」

オレ様を誰だと思ってる！！

大統領の一人息子、死神エミールだぞ！？」

「そうでございました。」

これは入らぬお世話を……」

アバドンの副隊長でもある死告族に心配されつつも強がるエミールだったが、足は震え顔色も良いとは言えない。

そんなリーダーの姿に不安を隠せない隊員達。

ちなみにその時アグニは、少し離れたところで欠伸をしていた。

たまに向けられるエミールからの視線にも気付かない振りをしながら……。

「ふああああ………眠っ」

「貴様もついてきたのなら気合いを入れろ」

「そうだ、そうだ！」

戦闘も碌にしない悪魔が暇そうにするなんて生意気だぞ！」

「ああ、そいつあ失礼。

今後気を付ける………かもしれないわ」

ここでもアグニの扱いは余り良くないようだ。

その評価も当然なのかも知れない。

何故かという、アグニは今の家庭教師という立場になってから戦闘を行ったことが殆どなかった。

それどころか殆ど大統領府内をうろちよろしているところか、昼寝しているところしか見られていなかったのだ。

もちろん彼の部屋などのプライベートの部分は知られていないが、よく見られる姿がだらけているところなのでコネで入ってきた残念な悪魔という印象が強いのである。

ちなみに数少ない戦闘と言うのは、エミールに強請られて軽く模擬戦をやった位なのでアグニの正確な戦闘力を知っている者はここに存在しない。

「かの有名な『孤軍』に似た名を持ちながら………情けない！！」

ちよつとは前に出て戦ったらどうだ！」

「そうだ、そうだ！ 戦ってみろお！」

「いやいや、俺戦い苦手だし。

地獄の極悪人相手にしたら死ぬぞ？

（どうせコイツら戦ったら戦ったで文句言っただろうなあ………

・めんどくせえ）」

「フン、腑抜けが！

もういい、各自進行用意だ！」

「「「「了解！」「」「」」

完全にアグニを視界の外に追いやり、地獄へ向けて歩を進め始めたアバドンの面々。

しかしその所為でアグニの呟きを聞き取ることが出来なかった。

『つていうか弱いもの虐めなんかしても面白くねえしな』という呟きを……。

そんな若干の衝突もありながら、ついに地獄へとたどり着いたアバドン+。

地獄の中は少し騒がしく、囚人たちはその口々に反逆者達について話している様だ。

エミーゼルは話を聞くために囚人たちの監獄へと近づいていく。

「オイ、反逆者について何か知っているか？」

「ア？ 何だこの餓鬼？」

餓鬼は家に帰ってクソして寝な」

「な！？ オレ様を誰だと思っている！

オレ様は大統領の一人息子、死神エミーゼル様だぞ！」

「な、なんだと！？」

監獄内がにわかに騒がしくなる。

やはり大統領の息子という肩書きは大きな意味を持つようだ。

囚人たちは話し合いを始め、数分後に一体の悪魔が前に出てきた。どうやらこの囚人グループのリーダーのようだ。

「初めまして坊ちゃん。

で、何をお聞きになりたいんです？」

「今地獄を騒がせている反逆者についての話を聞かせろ」
「ふむ、わたくし達もそれほど多くの情報があるわけではありませんせんが、お教えいたしましょう」

どこか老成している猪人族の話を聞いてみると、どうやら反逆者はプリニー教育係の二人であり、地獄の獄長もその仲間らしいとのこと。

他にも幾つか情報はあったが、その殆どが伝える際に歪んでしまったであろう情報ばかり。

たとえば反逆者は身の丈10メートル以上だとか、その強さは魔界大統領に匹敵するなど様々だ。

この情報を真に受けたエミーゼルは動揺しながら、アグニへと視線を向ける。

するとアグニが小さく首を横に振り、その情報は信じなくて良いと伝えてくれた。

それを見て少しだけ気を取り戻したエミーゼル。

「もういい、雑談に戻ってくれて良いぞ」

「あの、坊ちゃん。」

坊ちゃんは何をしに来たんですか？

「やっぱり……」

「多分想像している通りだ。」

オレ様達は政府に仇なす反逆者の拘束、もしくは排除が目的だ！

そう自分で言っておきながら、排除という単語のところで若干顔が歪んだ事に気付いた者はいないようだ……アグニ以外には、アグニはそんなエミーゼルを見て、『やはり殺す覚悟はないか……』

・・・面倒なことにならないと良いけどな』と心の中で思っていた。今回の任務に極力手を出さないと決めているアグニにとって、この任務は若干面倒くさいアトラクション程度の印象しかないのだ。

「そうですか・・・ところで坊ちゃん。

情報を教えた報酬はないんですかね？」

「報酬？」

「流石に何もしってワケじゃないですよね？」

そうドスのきいた声でエミールに報酬を求める囚人。

その迫力に少し圧され、一歩後ろに下がってしまったエミールだったが、このままでは舐められると思い、そこで踏みとどまりにらみ返す。

「いいだろう、父上に口利きしてお前達の刑期を少し縮めてやろう。それでいいか？」

「そりゃあ、ありがてえ！」

おい、聞いたか野郎ども！！

この坊ちゃんか刑期短くしてくれるってよ！

感謝しろよ！！」

「「「ありがとうございやす、坊ちゃん！」「」」

「ぜ、全員か？」

それはちよつと・・・」

「あ？ 何か仰いましたか坊ちゃん？」

「い、いや。なんでもない。」

それじゃあ行くぞ！」

そう言い残して足早にその場を去るエミーゼル。
置いて行かれまいとしてアバドンも早足でその後を続くが、たった一人だけその場に残っていた。
その場に残ったアグニは再び雑談に戻ろうとする悪魔を一体呼び止める。

「なあ、そこのお前」

「あん？　なんだデメエ？

坊ちゃんの部下かなんかか？」

「似たようなもんだ。

で、ちよつと聞きたいんだが、ここのプリニー教育係の名前って知ってるか？」

「名前？　ああ、確かヴァルなんとかってやつだったと思うぜ？」

「もう一人の名前も分かるか？」

「そっちはフェンなんとかってやつだ。

なんでそんなこと聞くんだ？」

「いや、有名な悪魔だったら戦うときに気を付けなきゃならねえかな」

「プリニー教育係になるようなヤツが強い悪魔なワケないだろ？

心配しすぎだと思っぜ？」

「そうかもしれないな。

じゃあ情報サンキュ、有意義な地獄ライフを過ごしてくれ」

「余計なお世話だ！」

そうしてアグニもようやくエミーゼル達の後を追い始めた。
エミーゼルの後を追っている最中アグニは情報をまとめる。

「（ハゴスから聞いてはいたが、本当にヴァルバトーゼの野郎、プリニー教育係なんかやってたのかよ……）
それにもう一人のプリニー教育係はフェンリツヒか？
何でヴァルバトーゼとフェンリツヒが連んでいんのか知らねけど・
……コレはあの餓鬼にとって敵すぎるな）……………どうすっかなあ」

悪化した現状をどうするか思考するアゲニ。

暴君ヴァルバトーゼとその従者フェンリツヒを相手にするには戦力が足りなすぎる。

自分加わればいい勝負が出来るだろうが、別に敵対する理由もない（戦うこと自体に余り抵抗はないが、全力を出せない相手と戦うのは面白くないと思っているため、あまりやる気が無いのである）。とりあえず会ってから考えることに決め、いい加減追いつかないと不味いと思い、足を速めていった。

第3話（後書き）

エクストリームバーサス楽しみだなあ

……頑張って師匠を使いこなせるようにしないと！

第4話（前書き）

いやっふ

もう読み専に戻ろうか迷うくらいに集中力が無くなってるぜい
まあそんなこと言いつつもなんか書くと思いますわ

第4話

第5話

少し遅れたアグニが合流する頃には、既に反逆者達との舌戦が始まっていた。

昔聞いた声よりも若干幼い気がするが、過去に暴を競い合った一人の悪魔を思い起こさせる声だ。

どうやらエミーゼルは暴君に子供を相手する気は無いと一蹴されたようだ。

「さっきの囚人もそうだったが、お前もか！

オレ様を誰だと思っている！

魔界大統領の一人息子、死神エミーゼルだぞ！」

「それがどうし」な、何だつて~~~~~！！ 大統領閣下の一人息子様であらせられるとは！！」た

「そうとは知らず無礼な態度を取ってしまい、マジですいませんでした！！」

コイツの言うことなんか微塵も聞かなくてもいいんで、オレ様の話を聞いてくだ「良い度胸だな、貴様・・・ヴァル様の話を遮るとは」・・・イヤーーーーー助けてエミーゼル様あああ！！！！」

なんかコントみたいなものが始まっているのだが、一步離れた位置で冷静に現状を把握し始めるアグニ。

先ほどからうるさく騒いでいる派手な真っ白い衣装を着ているのは、

おそらく地獄の獄長だろう。

ヴァルバトーゼのことは知っているし、フェンリツヒが人狼であることも知っている。

しかし騒いでるヤツには見覚えが無かったことからアグニは、そう認識した。

突然始まった漫才にキョトンとしていたエミールだったが、未だ騒ぐ二人を視界から外し、先ほどヴァル様と呼ばれていた男に話しかける。

「何故お前はオレ様に平伏しない？

お前は大統領が怖くないのか！？」

「俺が恐れる？

何故そんなことをしなければならんのだ。

俺には貴様を恐れる理由など無い」

「分からないのか！？」

オレ様の親は魔界大統領なんだぞ！」

「貴様の親が誰だろうが、貴様自身を恐れる理由にはならん！それに俺が恐れるのはただ二つ。

イワシの小骨と、約束を破ることだけだ！！

大統領など知るかぁ！！」

そう言つて胸を張るヴァルバトーゼに気圧されるエミール。いつの間にか戻ってきたフェンリツヒも追撃を加える。

「閣下が大統領ごとき恐れるものか！ 我が主を舐めるなよ！」

「なんなんだよお前ら！？」

クソッ！ お前達と話しても埒があかない。

何にしてもお前達は反逆者なんだ！
力尽くでも従ってもらうぞ！
お前達！ 行け！！」

エミーゼルの号令をきっかけにアバドン第一分隊が突撃し、激しい戦闘の幕が開ける。

しかし戦闘経験の差か、序盤からアバドンは劣勢だった。
腕が、脚が、首が空に舞う。

「うぎゃああああ！ お、俺の腕がああああ！」

「駄目だあ、勝てねえ！」

「俺はこんなところで死にたくねえ！」

エミーゼルはドンドンと減っていくアバドンの構成員に動揺している。

それに反して淡々と屠っていくヴァルバトーゼとフェンリッヒの反逆者コンビを見て、アグニはそろそろ動いた方が良くかもしれないと自分の装備を確認し始めた。

最後の一人が倒れたとき、愛用武器の仕込み杖を片手にいつでも飛び出せる様にするために。

そしてついに最後の一人が地に伏した。

「お、オイ！」

もっとしっかりしろよ！」

「小僧……お前は来ないのか？」

お前も一端の悪魔ならば覚悟を見せてみる！」

「く、言われなくても、お前達なんかオレ様一人で充「はい、そこまでえ」アグニ！」

「引くのも勇気つてもんだぜ？」

今回は様子見って事でいいじゃねえか」

「でも！」

「まあまあ、とりあえずお前は門のところに残してきた本隊を呼んできな。」

流石に一对二は辛いだろ？」

「お前はどつするんだよ！」

戦わないんじゃ無かったのかよ！？」

「戦わないさ、ちよつと時間稼ぎするだけだ。」

いいから行きな」

「……………急いで戻ってくるからな！」

死ぬなよ！」

そう言い残して走り去るエミールゼルを見送り、アグニはヴァルバトーゼ達と対峙する。

今ここに立っているのは三人だけ。

「まったく死亡フラグっぽいからヤメロってんだよ……………なあ、暴君さんよお」

「……………アグニスか」

「久しぶりだな、そっちの人狼君ははじめましてだな」

「……………ヴァル様、知り合いですか？」

それに先ほどアグニスと呼んでいましたが、小僧にはアグニと……………」

「小僧がなぜアグニと呼んでいたかは知らんが、コイツはアグニスだ。」

お前も『孤軍』の話は聞いたことがあるだろう？」

「『孤軍』……召喚師アグニスですか？

しばらく噂を聞かないと思ったらこんなところで何を……」
「俺もやりたくてやってるわけじゃねえよ。」

後アグニは今の名前だ。

今は大統領府にいるからな……あんま目立ちたくねえんだよ。

弱いヤツに集られるのは好きじゃねえしな。

で話は変わるが暴君よお、俺は別にお前と事を構える気ないんだわ
「何？」

「今は訳あつてさっきの餓鬼の子守してるんだが、別に俺はお前を討伐しろって言われてるわけじゃねえ。」

それに俺が人の命令聞くようなタイプじゃねえのは知ってんだろ？」

「……目的はなんだ」

「目的？ ああ……うん、あの餓鬼を殺させないことかね？」

「分かった。あの小僧の命は保証しよう」

「ヴァル様！？」

「そりゃ、助かる。」

んじゃ俺はあんま手出さねえわ。

一応周りのレベルに合わせて動くが、自衛に関してはちよい強めに
行くからな？。

さてと……そろそろ合流したかねえ。

じゃ俺はここら辺で。

あ、一応礼として教えとくわ。本隊はさっきの奴らよりは強いだろうが、お前達程じゃねえから気楽にやってくれ。

今度こそ、じゃあな！」

アグニはそのままどこかに転移していった。

消え去った男の立っていたところを見ているヴァルバトーゼに従者
フェンリツヒが噛みつく。

「何故何もせずに逃がしたのですか!？」

幾ら『孤軍』とはいえ閣下にかかれば……………」

「そうかもしれない……………」だがヤツの真価は召喚能力にある。
もしここでヤツの切り札の一つを使われれば、かなり厳しい戦いを
強いられるだろう」

「ヤツの切り札……………ですか？」

「フェンリツヒよ、命奪の森を知っているか？」

「ええ、触れた者の命を奪う巨大な粘泥族の突然変異種がいます
う……………まさか」

「ヤツの切り札の一つはそれだ。」

俺達だけならば何とかなるだろうが、プリニーどもはそうはいかな
い。

故にもしヤツと事を構えるならば、地獄の外でやらねばなんのだ」

「そうですか……………全ては我が主の為に」

それぞれが自分の目的の為に突き進む。

少年は父のために、暴君は約束のために、従者は主人のために、そ
して過去の名を捨てた男は……………一体何を思うのか？

第5話（前書き）

エクストリームバーサス発売まであと少し
士補試験まであと少し…… or z

第5話

予想外の相手との遭遇をしたヴァルバトーゼ達は、本来の目的である処分される予定のプリニーを解放するために歩を進める。

しばらく歩くと彼らの目に、先ほどよりも多くの悪魔を連れたエミールゼルが立ちふさがっているのが見えた。

「反逆者ども！　ここでキサマらの反逆もお終いだ！！

今頭を下げた謝れば、捕まえるだけにしてやる！

抵抗するならオレ様自らお前達に鉄槌を下すことになる……………
どうだ！？

降参するなら今の内だぞ！？」

「くどい！

俺はただ約束を守りたいだけだ！！

早くそこをどけ！！」

「ぐう……………（やっぱりこうなるのかあ）。

いいだろう！　ならば力尽くで連行するぞ！」

「ちよつと待て……………、オレ様は反逆者じゃないぞお！

お坊ちゃま……………、どうかお許しを……………！」

そう言いながらエミールゼルに駆け寄っていく獄長だったが、その後ろで何か企んでいる様な笑いをする者が一人……………。
フェンリツヒは大きく息を吸い込んだ。

「おお！　流石はアクターレ獄長！

敵のリーダーである死神エミールゼルの首を取るために特攻して行っ

たぞ！

しかも相手を油断させる演技まで・・・・・・・・やはり獄長は勇敢だ
！！」

「んな！？」

この言葉を聞いて戦闘態勢に移行するアバドンの面々。
一気に場の空気は緊張していく。
そんな中ドスのフェンリツヒは、さらに追撃を加える。

「プリニーのためにそこまで身体を張るだなんて、わたくしフェン
リツヒ、涙で前が見えません！！」

「そうだったのかアクターレ・・・・・・・・スマン、俺は貴様を疑っ
てしまっていたようだ。

お前の勇気しかと受け取った！ 思う存分暴を示すがいい！」

「ええ！？ ウソだったの！？

っていうかコイツボクを殺すつもりなの！？」

アクターレは弁解の機会を与えられず、ドンドン窮地に立たされて
いく。

全ては策士フェンリツヒの思うがままに・・・・・・・・。

「ち、違っんです！

これは・・・・・・・・いやああああああああっつつつ！！
！！」

「こっちにくるなああああああ！！！！」

首を狙われていると思ったエミールは自分の武器である、杖を頭上高く掲げてアクターレへと向ける。

次の瞬間、振り下ろされた杖はアクターレをとらえた。バコツという音と共に頭部に当たった杖。

「ア……………アクターレエエエ……………!!!!」

ヴァルバトーゼの悲痛な声が響き渡る。

ゆっくりと倒れていくアクターレ……………。

「貴様……………よくも同士を!!」

「で、でも、アイツがいきなり……………ってアレ？
ボクの武器って……………」

「アクターレ……………貴様の勇姿は決して忘れない。
安らかに眠れ。お前は空で見ているがいい。

俺が貴様になり、プリニー共を解放してやるところを!!」

エミールは疑問の答えを得ることなく、新たな疑問にぶつかる。

「プリニーだつて!？」

お前、プリニーのために反逆してるのか!？」

「それは違うぞ小僧!

俺はプリニーのために戦うのではない。

プリニーとした約束のため……………イワシのために戦うのだ!

！」

「バカじゃないのか！？

そんなもののために命をかけるなんて！」

「俺には俺の譲れないものがある！

この戦いはそのためのものだ！！」

ヴァルバトーゼは、そう言って斬りかかってくる。

その一太刀はアバドン副隊長の手によって止められたが、それが開戦の狼煙となった。

「エミーゼル様は援護をお願いします」

「う、うん！」

「反逆者ども！ エミーゼル様を倒したいのならばまずは私を倒してみるがいい！」

「ほう、貴様……名は？」

「反逆者どもに名乗る名などないわ！」

死告族の副隊長はその手に持つ大鎌がヴァルバトーゼの剣を弾き、距離を取る。

どうやらフェンリツヒは周囲にいる大量の悪魔と戦っているらしい。

「貴様………テスカトリポカか。

少しは骨がありそうだな」

「ほう、馬鹿ではないようだ………しかし実力の方はどうか
な！？」

「クッ！」

テスカトリポカとは死告族のランクの一つであり、中級悪魔クラスの力が無ければならないものである。

その副隊長による、まるで嵐のような乱撃に防戦を強いられる。どうやらエミールは呪文を唱えている途中のようだ。

「副隊長！ ちょっと離れてくれ！

喰らえ反逆者！

ウインド！！」

「クッ！ 伊達に隊長をやっているわけではないようだな！
だが、この程度オ！」

ヴァルバトーゼが気合いを入れ、大きく剣を振るとエミールが放った風の塊は二つに裂け、その攻撃力を散らした。

しかしそれを予想通りとばかりに副隊長は追撃を加える。

「おかわりだ、ウインド！」

「甘い！ 返すぞ！」

今度は切るのではなく、剣の腹で風の塊を打ち返す。

流石にそれは予想出来なかったのか、副隊長は避けきれずに直撃してしまった。

「何ッ！！ ガアッ！？」

「副隊長！？」

「オマケをくれてやろう。」

カズィクル・ベイ！」

ヴァルバトーゼのマントの一部がコウモリへと変化し、副隊長の下へと高速で飛んでいく。

そしてコウモリは敵に近づくにつれて、その姿をまるで巨大な牙のように変化させる。

自身の放った渾身の風魔法が直撃した副隊長は身動きが取れず、その牙を見ていることしかできなかった。

出来上がったのは串刺し刑に処されたオブジェが一つ。
飛び散った副隊長の血がエミールゼルの頬に跳ねる。

「うぁ……………」

「……………（どうしたものか……………）」

「ヴァル様、そちらも片づいたようですね」

「え、なんで！？」

あんなにイッパイいたんだぞ！？」

「あんな雑魚が多くいたところで、何の問題もない」

「そんな……………」

絶望に打ちひしがれるエミールゼル。

逆に反逆者コンビも困っていた。

アグニとの約束で少年の命を取ることは出来ない。

それ故にエミールゼルをどうすればいいのか迷っているようだ。

「とりあえずプリニー共を解放するか」

「そうですね……」

「お、お前達がここでプリニー共を助けても、処分命令はもう出ているんだぞ!？」

ここで助けたって意味ないじゃないか!

お前達はコレで完全に政腐の敵として狙われる……それで
もいいのか!？」

フェンリツヒはその言葉を無視し、プリニー共の閉じ込められている
檻の扉を開ける。

こうしてヴァルバトーゼはプリニーを解放し、約束を果たすことが
出来たのだった、めでたしめでたし。

……まだまだ続くよ？

第5話（後書き）

まず一つ補足、デイスガイア4のシステムの一つに転生というシステムがある。

この転生というのは種族やクラスの変更を可能とするもので、転生前のレベルなどによって転生時の基本ステータスを上昇させることができるものである。

テスカトリポカは死告族のクラスの一つで、チエルノボグ（初期クラス） デス（2クラス） テスカトリポカ（3クラス） …… 3クラス目であり、ここまでに必要なのはチエルノボグでレベル40まで上げ、デスでレベル90まで上げることでのクラスへの転生条件が整う

因みに固有キャラクターを除くキャラクターには第6クラスまであり、死告族の最終クラスはタナトスと言い、ここまで行くには先ほどのことに続き、テスカトリポカをレベル180まで上げ、その次のクラスで360まで上げ、その次のクラスで760までレベルを上げなければならない

ここまでやってやっとレベル1のタナトスになることができる。正直原作のラスボスは何もしなければ100レベル位だったはずなので、ここまでしなくても苦戦はしないはず（相手のレベルを変更しなければの話だが）

やりこみ始めるとレベルより、武器重要じゃね？とか思ったりもするけど、レベル上げないと億ダメージなんて夢のまた夢なんだよ… 俺は一体分の最強武器手に入れた時点で気が抜けてしまって他のゲームに手を出し始めてしまいましたわ

次にヴァルバトーゼが撃ったカズィクル・ベイは固有技の一つで、自身の体を巨大な牙へと変化させて相手にかみつく攻撃です。

原作では使い勝手のいい技ではなかったので、あまり見る機会はなかったです。

最後にデイスガイア4の魔法は主にファイア系、クール系、ウィンド系、スター系、ヒール系、ステータスアップ系、ステータスダウン系に分けられます

攻撃魔法に関しては

メガ

ギガ

オメガ

テラ

の順に強くなります

テラ辺りになるとモーションも半端じゃなく、もうFFの召喚獣みたいなノリの攻撃です
オメガはネタですがw

第6話（前書き）

エクバ始めました……自分の下手さに絶望

第6話

檻から解放されたプリニー達がそろそろとヴァルバトーゼ達の前に並び始める。

その表情は安堵と感謝に満ちていた。

「助かりましたッス〜!!」

もう駄目かと思ってたッス〜!!」

「そうか……だがお前達の処分は既に決定しているらしいぞ?」

「マジッスか!」?

で、でも閣下が助けてくれるんッスよね?」

「俺はイワシの約束を果たしに来ただけだ。

その後にお前達がどうなろうと俺には関係ない。

……それに俺には新たにやる事が出来た」

「何ッスか?」

俺達の命以上に大事なんスか!」

既に死んだ身であるが故に、プリニーの命には価値があるとは言えない。

……何にでも例外は存在するが。

「当然だッ! 俺はこれからこの墮落した政腐の性根を叩き直しに行かねばなんのだからな!」

「な、何だって〜〜〜〜ッス!」

流石にこのセリフにはプリニー達も驚きを隠せないようだ。
ついでに言うともう一人も……。

「ば、バツカじゃねーの!？」

お前達二人だけで政腐がどうにか出来るわけないだろツ!！」

「黙れ小僧!」

「ヒイツ!？」

「閣下がやると言ったらそれは決定事項なのだ。

お前の意見など聞いてないわ!

そもそもお前達政腐が悪魔本来の役目である『人間を恐怖で戒める』
ことを怠っていたが故にこの現状があるのだろツが!！」

「そ、それは……。」

「少し落ち着け、フェンリツヒよ。

だが小僧も、コレで分かっただろう?

この状況を知ってなお、こんな些末な事しか出来ぬ大統領の目を覚
まさせるために俺は行かねばならんだツ!！」

「そ、それは重要なことツスけど、オレ達プリニーも助けて欲しい
ツス!

プリニー教育係なら!」

「……それも一理あるかもしれんな」

「閣下!？」

プリニーなど閣下が気にかけるような存在ではありません!」

「そんなこと言わないでくれツス~~~~~!！」

フェンリツヒは悩むヴァルバトーゼを見て、何とか妥協できる条件
を探していく。

今現在の戦力で政腐に殴り込むのは心許ない。

ならば忠実な部下が必要だ．．．．．そう考えたフェンリツヒはニヤリと笑った。

「どうしても言うなら、お前達の生きていく道が無いわけではない」

「ホントツスカ!？」

「ああ、本当だ。

お前達を選ぶべき選択肢は二つ。

大人しく政腐に処分されるか、閣下の忠実なるシモベとなるかだ!」

「そうだな、確かに俺のシモベになるのなら処分はさせん。

．．．．．ただし、俺のシモベはかなり辛いぞ?」

「．．．．．それでもいいツス!

オレ達死ぬまで閣下について行くツス!」

「そうか．．．．．ではついて来い!

戻って作戦会議を行うぞ!」

「「「「「了解ツス!」」」」」

呆然とするエミーゼルを残し、ヴァルバトーゼとプリニー達はその場を去っていった。

そんな中フェンリツヒがエミーゼルに近づいていく。

「オイ、小僧」

「．．．．．なんだよ」

「アグニス．．．．．いや、アグニに気を付けろ。

アイツはお前の手に負える悪魔じゃないぞ?」

「な、何を．．．．．」

そう言い残すとエミールゼルの言葉も聞かずにヴァルバトーゼの元に走って行ってしまった。

フェンリツヒは決してエミールゼルのために思って言ったわけではない。

むしろ信頼関係を掻き乱すために言ったのだ。

アグニが持ちかけた契約を考えると、彼がエミールゼルに危害を加える可能性はゼロに等しいのだから。

フェンリツヒの言葉に動揺するエミールゼルの元に、どこかでタイミングを計らっていたのかアグニが歩いてくる。

「おお、無事だったか？」

「あ、ああ何とかな……………」

「ん？ どうした？」

俺の顔に何かついてんのか？」

「……………お前はボクの味方だよな？」

「はあ、何言ってるんだ？」

「いいから答えてくれ！」

「……………お前の家庭教師なんだから、一応味方になるんじゃないか？」

「そう……………だよな。」

うん、そうに決まってるよな！！」

「わけわかんねえ……………」

で、これからどうすんだ？」

「え？ これから？」

まるで何を言っているか分からないという顔をするエミールゼルに、アグニは大きくため息をつく。

周囲を見回すとアバドンのメンバーの骸の山が出来上がっている。

「お前は何しに来た？」

「それは………反逆者を捕まえるか、倒すために」

「でもそれは失敗した。」

「じゃあ次はどうすんだって聞いてんだ」

「えっと、アイツらを捕まえるためには戦力が足りないから……
・増援を呼ぶ？」

「ま、それが正解だろうけどな。」

問題は誰を呼ぶかだが、それに関しては俺に心当たりがあ「ちよつとそこの二人組！………んだよ、邪魔すんなよ小娘」

せつかく現状を打破する案を出すところだったところを邪魔されたアグニは、若干機嫌が悪くなったようだ。

話を遮った張本人、突如現れた少女に文句を言い放つ。

「小娘！？ 失礼ね！！」

私はもう中学三年生なんだから！！」

「いや、小娘じゃねえか………」

「まあまあ、落ち着けて。」

でお前は誰なんだ？ プリニーの帽子被ってるみたいだけど」

「アタシ？ アタシはプリニー殲滅部隊隊長、風祭フーカよ！」

「プリニー殲滅部隊？」

どうやら彼女の話の聞くと、悪人の魂の増加に伴ってプリニーの皮が足りなくなつたので、プリニーの数を減らすために創設された新

部隊らしい。

その話を聞いてエミーゼルが何かを思いついたようだ。

「なあアゲニ！」

コイツらと一緒にアイツらと戦うって言うのはどうかな？」

「マジで言ってるのか？ 俺にはコイツらが強いとは思えねえんだが……」

「いや、父上が許可を出したんだ。

きつと何かあるに違いないさ！」

「……お前がいいならいいんじゃないか？（せつかくアイツに声かけたんだがなあ）」

「じゃあ決まりだな！ オイ、お前！」

どこかイライラした様子を見せている風祭フーカ。

手に持った釘バットを振り回していることからそれが伝わってくる。

「何よ？ やつとアタシの話を聞く気になったの？」

「その前にオレ様の話を聞け！」

知っていると思うが、オレ様は魔界大統領の一人息子、死神エミゼルだ！」

「へえ、偉いんだ」

「今この地獄に政腐への反逆を企む輩がいるんだが、その反逆者を捕まえるための人員が足りないんだ！

だからお前達の力を貸せ！」

「反逆者？ もしかしてプリニーを解放したヤツらのこと？」

最初はエミールゼルの話を実剣に聞くつもりが無かったフーカだったが、反逆者というワードに大きな反応を示した。どうやら彼女たちの目的もヴァルバトーゼ達らしい。

「ああ、アイツらがプリニーを解放したんだ！」

「ふん、ってことは目的は一緒って事かぁ…………じゃあ、別にいいわよ？」

ただしリーダーはアタシだからね！！」

「な！？ オレ様は大統領の一人息子だぞ！？」

「私の部隊なんだから私がリーダーに決まってるじゃない。

アンタは…………助っ人？」

「助っ人！？ オレ様は大統領の「まあ、落ち着け」…………アグニ！！」

「別にいいじゃねえか助っ人でも、なんでもよお。

大事なのはアイツらをどうにかすることだろ？」

（正直コイツらじゃ無理だと思うけどな…………明らかに統率取れてねえし）」

アグニはプリニー殲滅部隊の面々をザツと見回してみたが、私語をする者、欠伸をする者、こちらを睨む者など明らかに纏まっていな

い。おそらくリーダーであるフーカという少女に統率者としての経験がないのだろう。

歴戦の猛者であるアグニは一瞬でそれを見抜いた。

「それは…………そうだけど」

「今は目的を果たすことだけ考えてればいいんじゃないか？」

こだわりやら何やらは今は置いとけ。

アイツらに勝ちたいんだろ？

（それでもアイツら止められる可能性は万に一つなんだからよ）」

「………わかったよ」

「話はついた？　じゃあ、しゅっぱーっ！」

若干納得のいかないエミールと他人事のアグニを加えたプリニー殲滅部隊は、『地獄』の奥へと足を踏み入れていく。

その戦力は未知だが、リーダーの風祭フーカの自信と余裕は何かあるのでは無いかと思わせるものがある。

果たして彼らの実力とは？

そしてエミールは今度こそヴァルバトーゼ達を止めることが出来るのか？

第6話（後書き）

フーカが人気らしいですが、俺のヒロインはデスコです

風祭博士！僕にデスゼットさんをください！

……なぜデスコじゃないのかって？

そんなのデスコはあのメンバーに囲まれてこそ幸せだからに決まってるじゃないか！

第7話（前書き）

やっべえストックが切れそうだ……

第7話

プリニー殲滅部隊＋ はヴァルバトーゼを倒すため、地獄の中を進んでいく。

地獄は深部へ向かえば向かうほど凶悪な犯罪者が捕らえられており、虎視眈々と牢から出ることを考えている。

「なあ、僕は無実なんだよ……だから出してくれよお」

「私を出してくれればイイコトしてア・ゲ・ル」

「俺を出せエ！！ 出さねえと殺すゾ！」

「ウルサイわね！ アンタたち犯罪者なんだからしつかり罪償いなさいよ！！」

囚人達の願いをバツサリ切ったフーカに、ギョロつと視線が集中する。

そこから始まる盛大な罵り合い。

身体が大きくて見た目もヤバい悪魔と、口を開かなければ美少女のフーカの口論は非常に低レベルであり、飛び交っている罵声も「バカ」だの「アホ」だのと、まるで小学生の口喧嘩の様だ。

「ほお………意外と度胸座ってんな、あの小娘」

「お、おい、止めなくていいのかよ！？」

「アイツらは牢獄の中だし、問題ないだろ？」

でもまあ、ここで時間潰すのもどうかと思うし、止めるかねえ（なんか変なもんも見えたしな）

そう言うとアグニは囚人とフーカの間に立ち、手を広げた。
当事者の二人は予期せぬ乱入者に口が止まってしまったようだ。

「ここら辺にしておいてくんね？」

こっちには用事があるんだよ」

「あ………そうだった。」

こんなやつに構ってる暇なんてなかったわね！」

「そんなもん関係あるか！！」

そのメス餓鬼は俺達に生意気言っただんだ！

詫びの一つでもいれさせるや！」

「ぬぁんですつてえ！？」

「ああ、いいから！」

お前もうち行つてろ！！」

「ちょ！？ 押すんじゃないわよ！」

怒りから前に出ようとしたフーカを抑え、半回転させると背中をグツと押す。

するとフーカはたたらを踏んで一度こちらを睨むと、渋々エミーゼル達の元へ戻っていった。

しかしそれに納得のいかない囚人は怒りの矛先をアグニへと向ける。

「何勝手な事してんだよ！！」

もうちよつとだったつてのによお………」

「確かにもうちよつと近づけば、その手に持っていたナイフがあの小娘に届いていたな」

その言葉を聞いた囚人はまるで時が止まったかのように、動きを止めた。

そして今まで浮かべていた怒りの表情を消し、何も感じさせない無の表情へと変化させる。

「……………気付いてたのか？」

「たまたま……………な。」

それに深部に繋がれている悪魔があんな低レベルな口論するのもおかしいと思つて、お前の事観察してたんだよ。

そしたらお前の片手から光が見えてな」

囚人はその手に握っていた食事用ナイフを地面に放る。

どうやらフーカに見えないように逆手で握っていたようだ。

「ふう……………で、お前は俺のことを看守にでも話すのか？」

「いや？　俺はそんな告げ口みたいなことあ好きじゃねえもんでな」

「じゃあ何が目的だ？　別にあのメス餓鬼の部下つてワケじゃないんだろ？」

「なんで止めた？」

「一応一時的とは言え、仲間だからかねえ……………たぶん」

「曖昧だな……………まあバレちまった時点で諦めはするけどよ、それにしても残念だな」

「なんで殺そうとしたんだ？」

別に腹が立ったとかじゃないんだろう？」

「そんなもん簡単な理由だ……………殺したかったからだ！
死ぬ顔が見たかった。苦しむ顔が見たかった。」

怖がる顔が見たかった。 痛がる顔が見たかった。

それだけじゃ殺す理由にならねえかい？」

「……いや、立派な理由だ。

それじゃゆつくりと刑期が終わるまで休んでくれ」

「ヒヤハツ……ヒヤハツ……ヒヤアアツハツハツハツハツハツ！」

背を向けて歩き始めたアグニの後ろでは殺人狂の悪魔が永遠と笑い続けていた。

幸いエミール達は既に先へと歩を進めていたために、その異常な悪魔を見ることはなかったが、これから先の囚人たちも狂気と残酷さに溢れた極悪人の巣窟。

これから先まだ精神的に幼いエミールが歪まないかどうか若干の心配をしながら、アグニは急ぎ彼らの後を追う。

しばらく走り続けると、立ち止まって何やら話し合いをしているフー力達を見つけた。

「何やってんだ？」

「ああ、アンタやっと来たの？」

今エミールって子に何が出来るか聞いてたところなのよ。

でもちょうど聞き終わったところだから、次はアンタの番！

でアンタは何がでんの？」

「俺か……俺は戦闘に向いてないぞ？」

「いいから何が出来るか言いなさいって！」

「あえて言うなら……魔法と剣を少々つてところか？」

「なんだ、結構戦えそうじゃない」

「少々つて言ってたんだろ……話聞いてたか小娘？」

とりあえず俺にあんま戦力としての期待はすんな。

援護ぐらいは出来ッけど、あんま火力ねえからな」

「いいわよ？ 実際アタシだけでもどうにかなるんだから、それをアシストしてくれればそれだけでいいわ」

自信満々にそう言いきるとフリーカはアグニに背を向け、足を進め始めた。

しかし数歩も歩かないうちに立ち止まり、振り返る。

「そうそう、最初は宣戦布告するだけだからアタシとアタシの部下だけでいいわ。」

「アンタたちはここで待ってて」

「宣戦布告う？」

「なんでそんな面倒くさいことするんだ？」

「だっていきなり奇襲だなんて悪役のする事じゃない。」

「アタシはこの夢の主人公なんだから正々堂々と叩き潰してやるわよ！」

「「夢？」」

「じゃあ行ってくるわ！」

フリーカの発言に疑問を感じた二人を置いて当の本人は足早と去ってしまった。

残されたプリニー殲滅部隊の面々も呆れ顔である。

とりあえず疑問を解消するために近くにいる隊員を捕まえ、話を聞くことにした二人。

「さっきアイツ夢の主人公がどうのとか言ってたけど、どういう意

味なんだ？」

「隊長は．．．．自分が死んだことを認められずに、この世界の事を夢だと思い込んでいるんです」

「はあ？」

「何かに襲われたのは覚えているようなのですが、そこで気絶して夢を見ていると思い込んで．．．．」

「そうか．．．．お前達も大変だな」

その言葉に対して返ってきた返事は、言葉ではなく長いため息だけだった。

第7話（後書き）

プリニーもレベルが高ければそれなりのステータスになるので、あんまり馬鹿に出来ない……そしてプリニガーXというプリニー亜種みたいなのは最強の種族だしw

一度食らった攻撃はダメージが0になるっていうスキルはマジ鬼畜あれ仲間になったらチーとだなあ……ならないけどw

第8話（前書き）

FF13 - 2 発売日

一週間後に学力試験

……いえーい

第8話

しばらくして部下を引き連れたフーカが胸を張って戻ってきた。
どうやら無事宣戦布告を終えたようだ。

「今戻ったわよ！」

アンタたちにもアタシのカッコイイところ見せてやりたかった位なんだから！」

「へーそうですか……。で、戦うのは何時だ？」

「明日の朝、腐界ヶ原ってところで！」

「ハア！？」「」

「何よ？　なんか問題ある？」

「イヤイヤ、あるに決まってるだろ！！」

準備とかしないのかよ！？」

「テメエ、アイツらのこと舐めてねえか？」

「準備なんて要らないわよ？」

だってアタシにはコレがあるもの！」

そう言つて手に持ったエスカリボル……。釘バットをホームラン予告のように突き出す。

何故かただの釘バットのはずなのに、所々にある血痕が禍々しい。

呪いの武器と言われても信じてしまいそうである。

だがソレとコレとは話が別。

「いや、お前はそれでいいのかも知れないけど他のヤツはどうすんだ？」

「大丈夫でしょ？ 戦争は数よ！！

あつちはプリニーと偉そうな男二人だけなんだから、こつちに負ける理由なんて無いんだから！」

「オレ様の話聞いてたか？」

「って言うか小娘……お前まさか決闘じゃなく、戦争の宣戦布告してきたのか？」

「そうよ？」

「な！？ 周りのヤツらは止めなかったのか？」

お前ら悪魔だろ！」

エミーゼルがフーカに着いていった隊員達に怒鳴り散らす。

何も言えずに下を向く隊員達。

何故怒っているのか分からないフーカは混乱しているようだ。

「な、何怒ってんのよ！？

戦争も決闘も戦うのに変わりないじゃない！」

「小娘……それは人間の理論だ。

悪魔にとって戦争は無駄の多い唾棄すべきこと。

悪魔の戦う理由は暴と暴を競い合うことこそ戦いの醍醐味なんだ。

テメエのやったことは相手の感情を逆撫でただけだ」

「何よ、アイツらが怒ってたって関係ないじゃない！

怒ってるからって強くなるわけじゃないでしょ！？」

「……戦い舐めてンだろ？」

感情が戦闘力に関係ないわけねえだろうが！

アイツらは悪魔であることに誇りを持つてんだ。

魔界に人間界の悪影響を与えねえために気合い入れてくるに決まってるんじゃないか！

(アイツらが油断してたら、まだ万が一があつたつつうのに……
・色々準備しとくかねえ)」

「……いいじゃない、上等よ！」

アイツらが強くなるんならそれ以上の力でねじ伏せてやるわ！

それにアンタ達こそアタシのこと舐めんじゃないわよ！

アタシはこの夢の主人公、風祭フーカなんだから！！」

まるで拗ねたように何処かに歩き去ってしまったフーカ。

エミーゼルは未だにプリニー殲滅部隊の隊員達に説教している様だ。
しかしアグニは今この場にいないフーカのことで、隊員達に聞いた
ことが出来た。

故にエミーゼルの説教を強制的に止める……デコピンで。

「痛ッ！？ いきなり何するんだよ！」

「コイツらに説教したつてしょうがねえだろうが。」

あの小娘には俺の方から一応言つといたから、そこら辺にしとけ」

「だってコイツらが止めてれば！」

「立場が上だったから意見言えなかったんだろ？」

それにもう過ぎたことだ、次が無けりや問題ない。

それ以上に俺は聞きてえことがあんだが……」

とりあえず一番近くの隊員の肩を掴んで、質問する。

先ほどまで説教されてたからか、少し身構えているようだ。

「そんな緊張すんな、ちょっとした質問だつっうの」

「な、なんでしょうか？」

「いやな、あの小娘．．．．風祭フーカと言ったか？
アイツは強いのか？」

「．．．．ええ、力だけは確かです。

今ここにいる隊員は全員一度あの方に倒されてますから」

「へえ．．．．アイツそんなに強かったのか。

まあオレ様ほどじゃないだろうけどな！」

「そうかもな．．．．（訓練の時の力が万全に出せればの話だけだな）」

「あの．．．．そろそろあの方を追いかけたいのですが」

「ん？ ああ、別にいいぞ？

情報ありがとな」

「いえ、じゃあみんな行くぞ！」

「「「「オーツ！！」「」「」

数人の隊員がフーカの去った方向に向かって走り始める。

どうやら多くはないが慕ってくれている部下は何人が居るようだ。

バカナ子ほど可愛いと言うので、何とも言えないが。

「プリニーのなり損ないでも部下に慕われてるんだな．．．．
それに比べてボクは．．．．」

「まあ、しょうがねえ部分もあんじゃねえか？

やっぱ大統領の息子つつう印象が強いからな。

ハードルが高くなっちまってんだよ」

「そっか．．．．でも、何時かは流石大統領の息子って言われる立派な悪魔になって見せる！

そのためには、まずこの任務を成功させなきゃ！

お前も手伝ってくれよ？」

「お前自身の力でやんなきゃ意味ねえんだろうけど、まあ．．．．

・少しくらいなら手伝ってやるよ」
「ありがとう！」

手伝うと言っても方法は色々ある。

危機に陥ったときに戦略的撤退をさせるのも一つの手伝い。

アグニは少しだけ後ろめたさを感じながらも笑顔のエミールゼルに苦笑を返した。

明日の戦い、勝てる確率は決して高くない。

第9話

決戦の日、アグニとエミーゼルが決戦の場となる腐界ヶ原へと着くと、そこには予定した時間のかなり前だということにもかかわらず、フーカ達の姿が見える。

どうやらかなり気合いが入っているようだ。

アグニが少しだけ感心していると、フーカ達がこっちに気付いた。

「アンタたち、遅かったじゃない！」

「いや、まだ予定よりかなり早いぞ？」

お前達どれだけ早く来ていたんだ？」

「アタシ？ アタシは遅刻しないために昨日の夜からいたわ！」

「ハア！？ バツカじゃねえの！？」

「何よ、別にアンタに迷惑掛けたわけじゃないんだからいいじゃない！」

エミーゼルとフーカは楽しそうにしているのでとりあえず放って置いて、アグニは愛用の仕込み杖を手にイメージトレーニングを始める。

自身の力を出来るだけ隠しつつ、援護を行わなければならない。

もしここでアグニが強いと知られてしまうと、今後少し動きにくくなる上にエミーゼルがアグニを頼ってしまうかも知れないからだ。

短い間とは言え先生役を行っていた身として、出来れば心身ともに強い悪魔になって欲しいと思うのが親心ならぬ先生心。

彼には自分の意志を強く持ち、他者の力が無くとも目の前の壁を破壊できるようになって欲しい。

それにこの作戦が失敗してもエミーゼルにとってはいい経験になる

だろう。

挫折を知らない者は増長しやすく、油断は容易く死に繋がる。もしここで完膚無きまでに負けたとしても、それを進化の礎と出来れば何の問題もない。

アグニは彼を殺させるつもりなど無いのだから。

ちなみに端から見ても杖を抱えて目を瞑っているのだが、この杖が仕込み杖であることは今ここにいて誰も知らない。

故に剣を使うと聞いていたフーカとエミールはそこが気になった。

「あれ？ アンタって剣も使うんじゃないの？」

「見えないところに剣を隠してるとってワケじゃないさそうだよなあ」

「そうよねえ……アンタの剣ってどこにあんの？」

いつの間にか結構仲良くなっていた二人が瞑想しているアグニに問いかける。

するとアグニは一端イメトレを中断してゆっくりと目を開く。

「剣ならここにあんだろ？」

「何処にあるって言うのよ！」

何、まさかバカには見えない剣とでも言うつもり！？

「そんな剣あったらバカを斬りたい放題だな……」

「違えよ、コレだコレ」

「コレって……杖じゃない。」

やっぱりバカにしてんでしょ！

「だからちげえて、仕込み杖だつっの」

「仕込み杖ってなに（よ）？」

「そこからかよ……まあ、見た方はええな」

そう言うときアグニは杖の持ち手の部分を引っ張る。
するとスツと音もなく杖の中から鋭い刀身が現れた。

「カッコイーーーーー!!」

コレ頂戴!」

「バカなことやってンじゃねえよ、これは俺の愛剣だぜ?
どれだけ苦楽共にしてきたと思ってやがんだよ」

「なあアグニ、剣が杖に入ってるのは分かるんだけど、この杖って
魔法も使えるのか?」

「当たり前だろうが、これ結構値打ちもなんだぜ?」

「へえ………ってアレ? 愛剣ならなんで今まで訓練の時に
は抜かなかつたんだ?」

アグニは過去に何度かエミールに実戦形式の訓練を着けている。
その際彼が使っていたのはごく普通の杖。
訓練でエミールは彼に勝てなかったので特に疑問を覚えなかった
が、剣を使えると聞いたとき内心結構驚いていた。

「剣は加減が効きにくいからな。
魔法なら自分の制御次第でどうにでも出来るから訓練に向いてたん
だよ」

「アレでか………?」

「アレって、そんなに強かったの?」

「強かったって言うか、エグかったって言うか」

エミーゼルの話を聞くと、大きな火球の影に大量の小さな火球を仕込んだり、火球に火球をぶつけて速度を上げたりしてきたようだ。実戦経験があれば別なのだろうが、エミーゼルには少し厳しい内容だったのだろう。

しかしそれで彼の実力が上がったのも事実。

魔法はただ放つのではなく、それをどう使うかで魔法使いの強さは決まる。

形式に捕らわれない魔法は実戦で必ず役に立つ。

それをエミーゼル自身も分かっているからこそ、内心では結構感謝していた。

「ってなんだ、アンタ少して言ってたのに結構強いんじゃない！」

「いやいや、ちょっと狡いだけだぞ？」

火球の温度も高くなかったしな」

「ああ、確かに当たってもそこまで大きな怪我はしなかったなあ」

「な〜んだ、でもまあ予想以上に援護に期待出来そうね！」

フーカはそう言うのとアグニにウィンクし、釘バットの素振りをはじめた。

どうやら聞きたいことを聞き終えて満足したらしい。

「それにしても早く来すぎたんじゃないか？」

後二時間以上あるぞ？」

「まあまあ、別にやることがあったわけでもないし、いいじゃないか」

「まあな、それにしてもお前今度は勝てそうなのか？」

「前は結構一方的に負けたんだろ？」

「今回は大丈夫だ！ 今度は一瞬たりとも気を抜かないし、魔法を過信しない！」

「……………それならいいけどな」

決戦まで後二時間。

激しい戦いの幕がもうすぐ開ける。

第10話（前書き）

クリスマス？ なにそれおいしいの？

第10話

約束の時刻まであと少しといったところで、遠くからヴァルバトーゼ達がやってくるのが見えた。

その姿には一片の気負いも無い様だが、何故か動揺している。

プリニー殲滅部隊は前口上を行うためフーカを一番前にして陣形を取り、エミールゼル達はその若干後ろに位置取っていた。

「何故俺達よりも早くここに居る!？」

コレではまるで遅刻したようではないか!」

「フフン　　当たり前よ、なんてったって昨日からここに居たんだから!」

胸を張っているようだが残念ながら感心する者はここに居ない。

前日から居ることが必要な場合は場所の事前調査か、汚い手を使うのならは罠を用意するためだろう。

フェンリツヒは念のため周囲を何気なく観察し罠の存在を確認するが、特に仕掛けられている様子は無いようだ。

そのことを自身の主に報告しようと振り返る。

すると……………。

「なん……………だと？」

昨日のからとは、やるではないか!」

「閣下……………お願いですから、アホと同レベルのところで争うのは止めてください」

「アホってなによ!　遅刻しないために早く来たんだからいいじゃ

ない！」

「黙れ小娘！ 閣下に敵対する女などアホで十分だ！！」

「ムキヤーーーー！！ もう怒ったんだから！」

「アンタたちなんかプリニーと一緒に殲滅してやるんだからね！」

「せ・ん・め・つ！」

「そう言えばまだ聞いてなかったな、お前は何故プリニーを消そうとする？」

「お前も人間の魂ならば同胞のようなものではないか」

「どうほう……ドウホウ？」

「仲間ってことだ……アホが」

「な、何よ！？ しょうがないじゃない！」

「中学校じゃ習ってないのよ！」

「それにプリニーと仲間ですって？」

「バカなこと言わないで！！」

「アタシが、アタシ達がプリニーの所為でどんな目に遭ったか知らないからそんなことが言えるのよ！！」

「アタシの夢なんだからハッピーエンドしか要らないの！」

「だからこんな悪夢を早く終わらせるためにも、アンタ達はここで退場してもらっわ！！」

「自陣の武器釘バットを構え、臨戦態勢に入るフーカ。」

「しかしここで待ったを掛ける者が一人。」

「おいおいおい！ オレ様を忘れてるんじゃないか！？」

「あ……ゴメンゴメン、忘れてた」

「なんだ小僧、また来たのか？」

「当たり前だ！ お前達を倒すまでは諦めないぞ！」

「何度掛かってきても同じだ。」

貴様じゃ閣下には勝てない。

前回も閣下に怪我ひとつさせることも出来なかっただろうが。まあオレが居る限り閣下に指一本触れさせるつもりはないがな」

そう言つてフェンリツヒは、なにも言わないアグニを見る。

前の戦闘が終わりさえすれば、エミールとアグニは撤退すると思つていたフェンリツヒからすると、現在の状況は若干の予想外なのである。

閣下と自分が居れば負けることは無いと思つてはいるが、閣下が言う命奪の森の主の存在が気になる。

それにアグニ本人の実力も目にしたわけではない。

明らかに情報が足りていないのだ。

部下のプリニーに情報収集をさせてはいるものの、如何せん集まる情報は眉唾物ばかり。

曰く孤軍は不死である、曰く異世界の魔王と交流がある、曰く過去に国ひとつを瞬く間に攻め滅ぼした等色々だ。

そして孤軍アグニスの情報について回る21人の悪魔で構成される近衛隊。

積極的に暴を示していたわけではないが、その強さは上級悪魔の中でも群を抜いていたと言われている。

特に有名だったのは夜魔族の最上級種。

その者は本来火の中級魔法までしか覚えられないハズの夜魔族にもかかわらず、火・氷・風・星の最上級魔法を全て覚えているという異常な悪魔。

最近見かけたという情報は無いが、何処かで孤軍の再起を待っているらしいとの噂は絶えない。

なんにせよ警戒して損はない。

暴君時代の閣下ならまだしも今の閣下には魔力が無く、全盛期とはほど遠くなっているのだから。

そんな絶賛警戒中のフェンリツヒの言葉に反応したのは、予想外にもフーカだった。

「え、何？ 接戦だったんじゃないの？」

「アホが、こんな小僧に閣下が苦戦するはずがないだろう」

「ウソ……だって、大統領の息子って強いんじゃないの！？」

信じたくない気持ちを抑えつつ、フーカは確認のためにエミーゼルの方へと振り返る。

しかしそこにはフーカが望んでいた否定的な表情はなく、苦虫を噛んだような顔があった。

流石にその表情を見るとこれ以上責めるわけにも行かず、再び顔を戻す。

「べ、別にいいわよ！ どうせアンタたちなんて私達だけでも余裕よ！」

アンタたちを倒して、プリニーの皮を一枚残らず剥ぎ取ってやるんだから！」

「他者の物を無理矢理奪おうとするその浅ましい思想。

もはや貴様の悪意は悪魔すら越えているかもしれない」

「はい、誇りがない分悪魔よりも外道と言えるでしょう」

「そうだな、ならばプリニー教育係として教育すべきだろう……

・・恐怖もつてな！」

「言いたい放題言ってくれちゃって！

もう絶対許してやらないんだから！」

「お、オレ様も今度こそお前達に負けないんだからな！」

両方が戦闘態勢に入り、一触即発の空気になった。
小さなきっかけで戦いの火蓋は切られることだろう。
そんな中今まで一言も喋らなかったアグニも静かに準備を行う。
そう、いつ何が起きても対応出来る様に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2014y/>

フォーカード？ いや、革命だ！

2011年12月25日18時51分発行